

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02596

研究課題名(和文)西洋古典文学における「カッリマコス主義」の実証的解明を基幹とする作品論研究

研究課題名(英文)Studies on the classical literary works on the basis of practical researches into 'Callimacheanism'

研究代表者

大芝 芳弘(Oshiba, Yoshihiro)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：70185247

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文):本研究は、西洋古典文学における伝統と革新の問題の解明のため、カッリマコスの詩論、所謂「カッリマコス主義」に焦点を当てたものである。「細やかな詩」を理想とするその詩学と先行文学との関係、またカッリマコス自身の詩作におけるその実践、また後世、特にローマ文学に与えた影響の具体的な様相などが主たる関心事であった。結果として、詩人自身の詩学の実践に関しては相当程度の進捗を見た。またローマ文学への影響に関しても、ホラーティウスらへの重要な影響関係を具体的に跡付けることができた。これにより、改めてカッリマコス詩学の重要性を確認するとともに、今後の研究課題へと繋がる成果を上げることができたと考えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

カッリマコスの重要性は欧米では広く認識されてきたが、我が国では必ずしも十分に研究されてきたとは言えない。本研究はその欠落を埋めるべく一定の貢献をなすとともに、さらに今後の研究を促すものであると考えている。

研究成果の概要(英文):This research project aims at elucidating the poetics of Alexandrian scholar-poet Callimachus, the so-called Callimacheanism, with a view to clarifying the problems of tradition and innovation in the classical literature. We are mainly concerned with the questions about (1) how Callimachean poetics with its ideal of refined and subtle 'small poetry' was engendered from previous tradition, (2) how the poetics of Callimachus was put into practice and embodied in his own poetry, and (3) how the deep influence of Callimachus can be observed in works of Roman poetry. In the second approach we have made good progress, and as to the third approach we can report that the significant influence could be detected in the poetry of Horace and Propertius. Thus the vital importance of Callimachean poetics is once again recognized and confirmed, so that we would like to assert a certain measure of positive result that leads to further projects in the future.

研究分野：西洋古典学

キーワード：カッリマコス 伝統と革新 ジャンル 詩学 詩論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究組織を構成する両名の研究者、研究代表者の大芝芳弘と研究分担者の小池登は、従来から西洋古典学研究者としてともに共通の関心と研究手法を持ち、互いに教育と研究の上での連携を保って来ていたが、特に2013年度からは首都大学東京における同僚となったため、研究遂行上もいっそう強力な協働体制が整った。大芝がそれ以前の東京都立大学の時代から首都大学東京となって以降も継続的に進めてきた研究は、基本的に西洋古典文学における伝統と革新、模倣と独創の問題を主たる関心として行われて来た。即ち、古代ギリシア・ローマ文学の諸作品をその形式と内容の両面にわたる様々な角度から実証的に検討・考察することにより、西洋古典文学における伝統の根強さと同時に、作者がその伝統に対して多様な工夫を凝らして新たな作品を作り出して行く革新性と創造性の機微を捉えることに努めて来た。これまでに採択された科研費の研究課題としては、「ギリシア・ローマ文学における叙述技法の解明を基礎とする作品論研究」(基盤研究C(2)、平成10-12(1998-2000)年度)、「西洋古典文学の諸文芸様式における文体論的特徴の解明を基礎とする作品論研究」(基盤研究C(2)、平成13-15(2001-2003)年度)、「西洋古典文学における間テクスト解釈理論に基づく実証的作品論研究」(基盤研究(C)、平成17-19(2005-2007)年度)、「西洋古典文学における「創造的模倣」の実証的解明を基礎とする作品論研究」(基盤研究(C)、平成20-22(2008-2010)年度)、「西洋古典文学における「ジャンル混交論」を基軸とした実証的作品論研究」(基盤研究(C)、平成23-25(2011-2013)年度)、「西洋古典文学における「引喩適合」の実証的究明に基づく作品論研究」(基盤研究(C)、平成26-28(2014-2016)年度)などがある。本研究はこれら一連の研究の成果の上に立ち、これらの研究において常に重要な存在として現れるカッリマコス存在の重要性に鑑み、改めてその文学理論(詩学)すなわち「カッリマコス主義」に焦点を当て、その先行する文学や哲学理論との関係、カッリマコス自身の作品におけるその詩学の実践・具体化の様相、そして後世の文学特にローマ文学への影響を具体的作品に即して見極めることを主眼としたものである。

2. 研究の目的

西洋古典文学においては、先行作品を踏まえつつ新たな作品を創作する「伝統と革新」の営みはその文学史を形作る基本的な原理であった。古代においてこれを創作上の原則として意識化し、先行作品との交流・対話の上に新たな作品を生み出す創作理念として提示することで、ヘレニズム時代の新たな文学観を主導したのがカッリマコス(Callimachus, c. 305 - c. 240 BC)であった。従って、彼の詩学、いわゆる「カッリマコス主義 Callimacheanism」の射程範囲を、後続のヘレニズム・ローマ文学はもちろん、先行するギリシア文学との関連をも含めて実証的に検証することは、西洋古典文学研究の最重要課題の一つと言っても過言ではない。本研究はこの課題を基幹に据え、従来の諸研究課題を継承発展させ、作品の独創性をその伝統との関わりにおいて明らかにすることを目的とする。

具体的には、古典文学では多様なジャンル(genre: 文芸様式)ごとの規範や約束事を受け継ぎつつ新たな作品を創造するという営み、即ち、ジャンルの「伝統と革新」あるいは「模倣と独創」が様々な次元で観察できるが、前4世紀末以降のヘレニズム時代になると文学創作のあり方も変容を遂げ、様々なジャンルの作品を学問的に研究することが創作の前提になると、文学創作の原理そのものに対する意識も先鋭化し、上述の「伝統と革新」の営みからいかに新たな作品を創造するかという課題が詩人たち自身の主要な関心事となる。まさにその時代に、「学者詩人」カッリマコスは、先立つ様々なジャンルの作品の伝統を受け継ぎ、それらに関する詳細な学問研究に立脚しつつ繊細な技巧や修辞を用い入念緻密な推敲を重ねて作り上げるべき新鮮で洗練された「細やかな詩」の理念を掲げて、ヘレニズム時代の文学観を代表する存在となった。彼のこうした詩学は、その後の文学、特にローマ文学(ラテン文学)の主流をなす創作原理として受け継がれて行く。従って、ヘレニズム期以降の文学の研究において「カッリマコス主義」の影響を見極めることは最重要課題となる。だが同時に、「カッリマコス主義」自体もまた先行する前古典期・古典期のギリシア文学の伝統を研究した結果として現れて来た考え方であった。従って、先行するギリシア文学諸ジャンル自体や哲学者の詩論等もまた、カッリマコスへの影響という意味で「カッリマコス主義」の重要な局面を担うこととなる。このように、「カッリマコス主義」

をめぐって、先行する文学・哲学との関係も含めて、それが古代ギリシア・ローマ文学において占めていた重要性を、内容と形式上の多様な観点から実証的に見極めることで、西洋古典文学における伝統と革新の問題を具体的な作品に即して明らかにすることが本研究課題の主たる目的である。従って本研究においては、まずはカッリマコス自身の文学理論と実作の究明を中核に、先行するギリシア文学や哲学等との関連と、ヘレニズム・ローマ文学への影響に大きく研究対象を区切り、具体的作品の中にその関連と影響の様相を跡づけ、文学的伝統と当該作品自体の持つ独創性の関係をカッリマコス主義の観点から実証的に明らかにし、当該作品とそのジャンルの伝統と革新に関する作品論として説得力ある議論を構築することを最終目標とした。

3．研究の方法

本研究は基本的に西洋古典文学作品特に韻文作品の綿密な読解作業を通じて、古典文学における伝統と革新、模倣と独創の機微を具体的に明らかにすることを目指すものである。従って、カッリマコス作品の場合も、それに影響を与えたとと思われる先行作品の場合も、またカッリマコスの影響下にある作品においても、いずれの場合もその観察と検討に際しての基本的作業は共通している。すなわち、対象とすべき作品を確定させた上で、まずは当該テキストに関して、先行研究を参照しながら文献学的に厳密な読解を行う。次に、当該テキストに関する可能な限り綿密・着実な観察を行い、形式と内容の上での多様な観点からの分析を進める。即ち、原典テキストそのものに即して、その韻律、措辞・語法、構文、修辞技法などの文体的側面と、主題、モチーフ、トpos、あるいはまた場面展開や作品構成など内容的側面の両面にわたる様々なレベルでの観察と考察を積み重ねることに努める。またその過程で、当該テキストと関連する類似箇所、並行例、そしてまさに「カッリマコス主義」的な創意工夫の事例に該当すると考えられる作品や部分に関しては特に、それらの関連箇所についても同様の読解作業を進める。その際には、単に部分的関連の確認に留まらず、関連箇所を含む作品全体との比較検討を行うことで、当該作品が先行作品のどのような要素との関連を持ち、また自らの作品にそれをいかに活かしているのかというその創造的工夫を作品全体との関連において考察する。

具体的には、まずはカッリマコス自身の作品における詩論的部分の読解と検討を行ない、同時にいくつかの作品自体におけるその理論の実践・具体化を跡づける。これと並行して、カッリマコスの理論や実作に影響した先行作品等との比較検討や関連性の考察を進める。他方で、カッリマコス主義を受け継いだ主としてローマ文学におけるその影響の様相を具体的な作品に即して検討する。いずれもまずは検討対象となる作品に関して、その形式と内容の両面からの綿密な観察を行うことで、カッリマコス主義の特質とその由来、またその影響下にある作品における伝統と革新の様相を具体的に跡づけ、作品論として論文にまとめることを目指した。

実際に検討・考察の対象とした作品としては、カッリマコス作品の中では主に『アイティア』、『イアンボイ』、また彼の詩学との関連からプラトンの作品中の詩論的内容やアリストテレスの『詩学』、また、大芝が従来から関心を深めているホラーティウスの諸作品、さらにこれもカッリマコスの影響が濃厚なローマ詩人プロペルティウスの作品のうち、自ら「ローマのカッリマコス」と名乗るなど明確に「カッリマコス主義」を標榜して作られた作品である。

4．研究成果

上述のような研究目的と方法のもと、カッリマコス自身がその詩論を語る部分の読解を基礎としながら、まずはその詩学が彼自身の作品のうちどのように具体化され実践されているかに関して、先行研究を踏まえつつ検討した。またその詩学が特にローマの抒情詩人ホラーティウ

スとエレゲイア詩人プロペルティウスの作品に与えている影響の様相を、具体的な作品に即して観察し、それぞれの論考にまとめることができた。カッリマコス詩学と先行作品との関連については、プラトーンの詩論やアリストテレス『詩学』との関連を検討したものの、具体的な成果を形にするには至らなかった。しかし、少なくともカッリマコス詩学それ自体の实践と後世への影響関係については具体的な作品論の形でかなり明確な描像を描くことができた。その意味で、「カッリマコス主義」の重要性を再確認する同時に、今後の課題にもつながる成果が得られたものと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小池 登	4. 巻 60
2. 論文標題 アイスキュロス『ペルサイ』93-101行の位置に関する文献学的考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 哲学誌	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大芝芳弘	4. 巻 12
2. 論文標題 Horatius, Carm.2.16 Otium divos	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 フィロロギカ	6. 最初と最後の頁 15-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大芝芳弘
2. 発表標題 Propertius, 3.11.57-72の読みと解釈について
3. 学会等名 古典文献学研究会（フィロロギカ）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小池 登、佐藤 昇、木原 志乃	4. 発行年 2019年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 vi+348
3. 書名 『英雄伝』の挑戦 新たなプルタルコス像に迫る	

1. 著者名 浜本裕美、河島思朗（編）、大芝芳弘他共著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 未定
3. 書名 西洋古典学のアプローチ	

1. 著者名 葛西康德（編）、大芝芳弘他共著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 未定	5. 総ページ数 未定
3. 書名 未定	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	小池 登 (Koike Noboru) (10507809)	首都大学東京・人文科学研究科・准教授 (22604)	